

教員3年目の僕からのメッセージ

竹 前 研

攻玉社中学校・高等学校

はじめに

この原稿を書いている時期は私が教員になり3回目の秋が終わるころです。私は都内に位置する攻玉社中学校・高等学校に新卒で専任教諭として採用いただきました。大学生の4年間、ご指導いただきました教職課程センターの方々には、この場をお借りしまして感謝申し上げます。さらに卒業して以降も勉強会や基本実験講習会などでご指導を賜りありがとうございます。卒業生寄稿のお声がけをいただき大変うれしく思いました。私は教員になって3年経っておりません。ですので、他の先生方のように濃密な体験談を持っているとは言えませんし、秀でた文章力もありません。しかし、教員を目指している大学生の皆様への少しの励みになるのであればと思い、私のここに至るまでの経緯と「その時に感じた思い」をつづらせていただきます。参考にしていただけることがあれば幸いです。

教員となってここまでの2年半は全力で駆けて来ました。落ちついて自分をしっかりと見つめ直すタイミングがありませんでした。この機会が私の「自分を見つめ直す機会」にもなるかと思えます。私が書かせていただくターゲットは主に大学生の皆様です。もちろんベテランの先生方や、教職関係以外の方々にも読んでいただき、北里大学教職課程ホームカミングディなどの機会にご指摘ご教授いただけたら幸いです。

長く文章が続くこととなりますので、以下、大まかな内容をまとめさせていただきます。

1. 大学4年生まで
2. 教員1年目の忙しさについて
3. 教員2年目の初クラス担任について（学級運営、教科指導など）
4. 教員3年目の教科力向上について（学級運営、教科指導など）
5. おわりに

数年間、教員という職業に就き、教員というものはつくづく「何でも屋」であると感じます。教科指導、生徒指導、生活指導から始まり、面談、家庭相談、掃除、電話対応、もの探し、恋愛相談、交通整理など何でもしてきました。

大学4年生まで

ここからは私が教員という職業を意識し、教員になるまでの話となります。興味のない方は次の項までお進みください。私は中学2年生の時に教員を目指すことを決めました。私の母校には「立志式」というものがあり、全校生徒に「僕は、今謳歌しているこの学校生活を支えてくださっている『先生』という職を目指す」と宣言したことを覚えています。その直後に担任の先生と大喧嘩したことも私の進路に大きな影響を与えました。自分の息子でもない私に対してしっかりと向き合って話を下さり、本当に感謝しました。その先生には成人式で、泣きながらお詫びをし感謝を伝えました。中学生では「教員」になることだけを決めていて教科へのこだわりはありませんでした。理科の教員になることを決めたのは高校2年生です。物理の授業で学習した「力のモーメント」が、通学で使用していた自転車の動く原理の説明に使えることに気が付いた時は鳥肌が立ちました。「『ただ問題を解く勉強』ではない勉強」をしたことに興奮しました。「教員」に就く者としては勉強の楽しさを知るのが遅かったのかもしれませんが、この瞬間こそが人生で初めて勉強が楽しいと感じた瞬間でした。

その後、北里大学に進学しました。大学生の4年間は勉強に遊びにアルバイトにすべてに全力で取り組みました。勉強では友達と夜更かししながら砂川先生の「電磁気学」を読み進めたことが印象に残っています。遊びでは夏休みに「倒れるまで遊ぶ」を目標に遊び続けました。サークルと、別の仲間内グループの合宿をはしごしたり、バイクで北海道一周ツーリングなどしたりしました。元アルバイト先の社員さんから言われたの言葉が印象に残っています。「大学の卒業式の日、もし入学試験の日に戻れるとしたら、『また同じ大学を受ける』と言えるくらいの充実した大学生活を送りなさい。」というものです。私の大学生活はまさにこの通りの充実した大学4年間になり、大きく成長できるものとなりました。これらの経験は私自身の人格を形作る大切な出来事です。大学生の皆さんもそれぞれやりたいことを全力でやってください。その思い出は辛いときの支えになってくれると思います。

大学4年生のときに物理学科の生物物理学講座に入り人工知能の研究を行いました。一時期「東ロボくん」という人工知能が話題になったかと思います。私は東ロボくんとは違ったアプローチのプログラムを組み、神奈川県公立高校の英語の入試問題を解く人工知能の作成を行いました。教育に興味があった私にとっては、とても熱中できる研究でした。この1年間の研究を通して「勉強とは知りたいことを追究するための手段である」ということを知ることが出来ました。理科教員になるのであれば、「研究」に没頭することは必要な過程かもしれません。

また「学び合い」という教職のゼミも開いたこともありました。模擬授業を行ったり、1つの課題に複数人で話し合い考えたりしました。その経験で「生徒の立場に立ってディ

バートをする難しさ」を知ることが出来ました。教員が適切な指示を出さなければ生徒達は何を問われているのか、何をもとに考えれば良いのか、そのようなスタートラインにすら立てません。)

公立高校の教員採用試験の本格的な勉強は大学3年生の夏ごろからゆっくりと始めました。それまでは大学の授業を受講し、塾講師のアルバイトや、ものを教えるボランティアに少々参加している程度でした。このころから始めると焦って勉強をする必要がなく、ストレスを一切感じずに試験勉強を進めることが出来ました。教職教養、一般教養は「これだけ覚える」的な参考書を丸々1冊すべて暗記した後に過去問を解きました。それだけで対策は十分でした。一日に数十分の勉強を毎日やればすべて覚えられるかと思います。専門科目は就職後に一番使うものですので、最も重点的に勉強することをお勧めします。教員になってからも勉強し続けることにはなりますが、私は今現在自分の力の無さに打ちひしがれています。小論文と模擬授業、面接に関しては友達や先輩方、先生方を頼りました。その際本当に多くの時間を割いていただき、かつご指導いただきました。本当に感謝しております。ありがとうございます。小論文は練習の回数を重ねれば重ねるほど伸びます。受験終了後に、初めて練習で書いた文章を読み返してみても、笑ってしまうくらい幼稚な文章を書いていました。それくらい伸びます。

教員1年目

教員になる際、私は次のことを目標に掲げました。これらの目標は教員3年目の今でも変わっておらず、気を引き締め直すときに思い出しています。

1. 学び続ける教員になること
2. 理科のプロになること（実感を伴う知識、発問を大切にすること）

よく言われることではありますが、現代の社会は変化の激しい時代と言われています。それを踏まえて、次世代を担う人間を育てる教員自身も社会情勢や環境に合わせて変化し続けなければならないと考えます。例を挙げるとしたらスマートフォンについての指導です。今でもスマートフォンを使わせない指導をしている学校があるかと思います。僕の教育実習先の指導教諭もおっしゃっていましたが、これからの時代は「スマートフォンの使用を禁止する指導」ではなく「使い方の指導」が求められます。現代では趣味や仕事などで一度も会ったことのない人と連絡を取るなどは当たり前です。日々の指導もその内容も変わらなければなりません。私たちのような理科教員であれば、新しい発見がなされたり、今までの常識が変わったりすることがあるかと思います。常に教員も新しいことを学び続けて実践し、生徒の見本とならなければならないと思っております。

私が教員をスタートしたのは、新型コロナウイルス感染症が流行し始めた春です。コロナ休校からスタートしました。攻玉社学園も休校中はオンデマンド型で授業を配信する対応を行いました。生徒の顔を一人も知らず、生徒も私の顔を知らない状況です。さらに人

生初めての授業がオンライン授業でした。不安でしたが、なかなか経験できないものでした。分散登校という形で生徒の登校が始まったことは、私にとっては良かったのかもしれませんが。私は高校1年生の5クラスの物理基礎を担当していました。1クラスを2つのグループに分けて分散登校を実施しました。ですので、合計10回同じ授業が出来る機会を得ました。はじめは緊張しましたが、10回ともなると自信をもって話をする事が出来るようになりました。部活動は硬式野球部の副顧問に配属されました。野球は授業の体育でやったことある程度で不安でしたが、主顧問の先生が丁寧にフォローをして下さりすぐに慣れました。高校3年生の副担任になりましたが、分散登校から始まったため、生徒のマスク越しの顔と名前を覚えることに大変苦労しました。

このように始まった僕の教員生活ですが、以下で細かく説明させていただきます。

1. 授業準備に追われる日々

通常授業の学校生活が始まってみると本当に大変でした。毎日進む授業準備に追われます。しかし教員の仕事は授業だけでなく、校務分掌、部活動の指導、進路相談など山積みです。それらがすべて終わった後にやっと授業準備に取り掛かる事が出来る形です。もちろん理科が好きで理科の教員になったので、授業準備は休日を使ってでも進めていました。しかし振り返ると、やりがいと体力との狭間で奮闘していた1年間でした。教員の「やりがい搾取」という言葉がTwitterで流行っていましたが、まさにその言葉を体現した生活でした。現在は働き方改革も少しずつ進んでおり、ほとんど無理のない生活になっています。大学生の皆さんが、この現状をどのように受け取るかはそれぞれの自由だと思います。今の私はやりがいを感じながら、仕事にも慣れ、休日は趣味にも時間を割いています。しっかりと将来を考え自分で選択してください。

2. なんでも飛び込んだ

新しいことをする、新しい環境に飛び込むということは右も左も分からないので大変です。しかしその分得られるものは多いため1年目は何にでも飛び込みました。会議資料の作成や、理科の先生方の授業見学、他教科の先生の授業見学、保護者会の見学、他教科の手伝いなど、「学校」を知るためになると考え、何にでも挑戦しました。その中でも保護者会の見学は先輩の教員に「そんな申し出、なかなかされない」と苦笑いをされてしまいましたが大変勉強になりました。このおかげで、先生方との敷居はすぐに低くなり、多くの先生方が声をかけて下さるようになりました。学び取れることが多くあり、挑戦してよかったと思います。前項で忙しかったという話をした直後ですので学生の皆さんが教員になった際に、多くのことに首を突っ込んでほしいとは思いません。しかし、他教科の先生方の授業見学や保護者会の見学は教員歴が短いときにしかお願いできないようなことだと思います。挑戦するときは、自分の体力と心の余裕と相談しながらやってください。

教員2年目

私が担任としてクラスを持つようになったのは、この年からです。中学1年生の担任となりました。校長先生から担任を任せたいと告げられた時は本当に興奮しました。私の学年は全6クラスで、他のクラスの先生方はベテランの先生ばかりです。そのため学年全体としての動きがはやく、ついていくのは大変ではありますが、その分学ばせていただくことは多いです。

入学式の日の子供達の姿をよく覚えています。生徒たちが登校してくる前に教室に行き、窓を開け、机を拭いて待ちました。大きい制服に「着られる」ようにして、校舎におどおどしながら皆入ってきました。入学式での名前呼びは新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、生徒は返事をしないという形でした。その分、丁寧に心を込めて名前を読み上げました。その後すぐに始まった校内オリエンテーションでは、校内の散策ということで、校内の特徴をクイズ形式（武道場に飾られている賞状は何枚か？保健室に置かれているベッドの数はいくつかなど）のワークシートを作成しました。これは私自身が中学1年生の時にやったもので生徒同士の敷居を低くすることができ、かつ校舎を知れるため、とても手ごたえのあるものとなりました。

5月ごろになると生徒達は次第に素の自分を出せるようになってきました。そのころから生徒指導も増え始めました。この頃は口論になりそのまま手が出てしまう生徒や、いじりがエスカレートしてしまい収集が付かなくなって喧嘩になるといったことが多かったです。学年主任や他の先生方に報告と相談を繰り返す日々でした。その点ベテランが多い私が所属する学年は、いろんな角度からの意見を聞くことができ、生徒への多くのアプローチ方法をご教授いただけたので本当に助かりました。また他の先生の生徒指導も参考にさせていただき、生徒一人ひとりの特性や、背後にあるそれぞれの環境に応じた声のかけ方など多くを学ばせていただきました。生徒指導の機会が多いほど、彼らを理解し成長を促せます。この年の大まかな説明は以上です。以下、学級運営、教科指導について書かせていただきます。

1. 学級運営で気をつけたこと

私がこの1年を通して勉強になったことは「担任は、クラスの様子に細心の注意を払い続け、助言をし続けることが求められる」ということです。この「続ける」ということが最も大切で最も大変なことだと感じました。時期によりクラスの雰囲気は流動的に変わり続けます。「2学期の初日は注意が必要である」とか「学校行事の多い時期は人間関係に変化が起こる」ということは良く知られることです。実際に担任としてクラスを見ていると本当に短いスパンで雰囲気は変化していました。そのなかでしっかりと生徒達の生活を観察しアドバイスし続けることが重要でした。

私がクラス運営で気を付けて行っていたことは2つあります。1つ目は、事あるごとに

クラス全体に「いじめは絶対に許されない。中学校生活をいじめという卑劣な行為で悲しいものにしないために、クラス全員がこの意識を持ちなさい。」という趣旨の話をする事です。また同時に「これは私の意見です。いじめるほうはいつだって冗談、しかし被害を受ける側はいつだって本気で受け止める。この残酷な行為を私は許せない。」という、私個人の意見も生徒に伝え続けました。そうすることで生徒達には「担任は常にいじめについて目を光らせている」という印象をもってもらえるように心がけました。実際に人間が集団生活をする以上、いじめをゼロにするというのは難しい話です。しかし、この指導を続けることで1年間のあいだに数回、生徒達から「すこしやりすぎているかも」といった相談が複数寄せられました。2つ目は毎学期に二者面談を行うことです。1クラス40名で構成されますので、毎日生徒一人ひとりと深い内容の話をする機会を取れるわけではありません。ですので、一人15分×40名の面談を昼休み、放課後の少しの時間を使って進めます。生徒達の生活もあるので二者面談実施の前に予定表を張り出し、生徒達が自分たちで変更を加えて予定表を完成させました。教員の前だとおとなしいが友達内だとお調子者であるとか、家庭での状況とか、〇〇先生への授業態度が悪いとか、本当に多くの種類の情報が集まります。面談の最後に必ず「クラスに困ってそうな人は居ますか。」と聞くようにしています。そうしますと生徒一人ひとりがクラス全体をみる視点を持ち、もしSOSを出している生徒が居たら助けるための足掛かりになります。

私の1年目のクラス運営で一番大変だった時期は2学期の後半です。クラス全体で互いを煽る言葉が横行してしまい、クラス全体の雰囲気が悪くなった期間がありました。煽り合いに参加していない生徒たちは教室の暗い空気にうんざりしていました。それは生徒達を観察していて伝わってきますし、2学期の二者面談でもポロポロと意見がよれられていました。そのなかの意見として「もう誰が最初に煽り始めたのか分からない。」「相手を煽らないと自分が煽られたままになってしまう。」というものもありました。煽り合いをしている生徒達自身も自分たちでは收拾が付けられず困っていたことは明白でした。ここでも私が実施したのが毎日の声掛けです。毎日の朝のホームルームで、クラスの雰囲気を悪くする行動言動は慎むことを伝え続けました。生徒達と一緒に生活している中で煽る言葉が出てきたときは、逐一会話を止め指導をしました。すると2学期が終わるころには見違えるようにクラスの雰囲気が改善していきました。毎日、言葉を変えながら同じことを指導し続けることは大変です。しかしその分しっかりと彼らに伝わっていくのではないのでしょうか。

2. 理科指導の進歩

この年、私は中学1年生の理科I、中学3年生の水曜講座（攻玉社中学校独自のカリキュラム）、高校1年生の物理基礎を担当していました。

中学1年生の理科Iは理科教科主任と相持ちで担当させていただきました。攻玉社中学校の理科Iは3回に2回のペースで実験をします。この1年は本当に学ばせていただくこ

とが多い1年になりました。私自身の受験期には化学反応式や生成物の色だけを覚えていた分野を、実際に実験を通して特徴を調べたり考察してみたりして、生徒と一緒に学ばせていただきました。教科主任が常に大切にしていたことがあります。それは「中学生のうちに理科の楽しさを知ってもらいたい」というものです。攻玉社学園に入ってくる生徒達は受験学力に関しての能力は高いです。ですので中学生のうちに理科の楽しさに気が付くことさえできれば、あとは自分たちで勉強します。私たち教員が出来ることといえば、きっかけを提供することと、後のサポートをすることです。

そのことが、高校1年生の教科指導にも応用がききました。タイミングは運動方程式の実験をしたあとのことです。運動方程式の実験は、よく実施される実験を展開しました。その際に、ある程度時間に余裕があったので、生徒たちに自由に条件制御を行うように指示をして、追加実験をしました。しかし授業時間には限りがあります。興味を持った生徒達にとっては短すぎる時間でした。そこで授業終わりに「物理チャレンジ」のポスターを紹介してみました。(この年の実験課題が運動方程式について独自の実験を考え、実験し考察せよといったものでした)すると、数名の生徒が挑戦してみたいと声をかけてきて、放課後に実験をしました。「独自の実験を考えてくるように」と生徒に声をかけた翌日に、生徒達の発想の豊かさに驚きました。私はせいぜい「液体の中で運動方程式の実験を行ってみてはどうか」というありきたりな提案をする程度でした。最終的に生徒が実施した実験は「水槽体を物体にぶつけ、周期的な波が発生する。その波と加速度の関係を考察する」というものでした。打点タイマーなどを使った実験では数値に現れないだろうと考え、ナリカから出ているイージーセンスを大いに活用していました。教員の立場から考えると分かりませんが、この実験は高校1年生の知識量では考察が滞ります。そこで彼らは自分で参考書を集め、知識を習得して考察を進めようとしていました。彼らの物理現象への探究心と知識への貪欲さには衝撃を受けました。まさに、教科主任の言う「きっかけを与えれば生徒たちは自分で勉強する。私たち教員が出来るのはそのサポートである。」ということを実感しました。今では常にその意識をもち教育活動に臨んでいます。

後日談ですが、生徒達が考えた水槽体を使った運動方程式の実験が終わった後に、先輩の物理教員に物理チャレンジの話をしました。その時に「水槽体も面白いけれども、振り子を吊るした物体をぶつけてみたほうが高校生も考えやすく、深い考察につながったかもね」をいう意見をいただきました。生徒たちの発想に衝撃を受けた結果、視野が狭くなってしまったため、その考えに行きつきませんでした。もし実験中にその提案を生徒たちに出来ていたらと考えると、自分の力の無さが悔しいです。先も書きましたが、私たち教員にはきっかけを与え、サポートすることが求められると考えます。そのため、その先輩教員のような提案ができるように自分自身の教科力を高め続けることが私のような新米教員には必要だと思います。私はこの悔しい思いを忘れることなく教員としての能力向上に努めようと決意しています。

教員3年目

ここからは、教員3年目についてをつづらせていただきます。3年目の変化としては、わが校で働き方改革が推進され部活動顧問の負担が軽減されたことがあります。担任はそのまま持ち上がり、中学2年生の担任となりました。担当する授業は中学理科I（主に化学分野）と高校3年生の物理学演習（受験指導）です。

1. 実験についての進歩

高校3年生の1学期前半は磁気学分野からの学習となりました。私は教員になった際に大切にしていた「実感を伴う知識」を授業に取り入れようと考えました。行ったこととしては、電磁誘導の法則を検流計と500回巻きコイルを用いて確認する。アルミホイールを用いて平行電流間に働く力を観察する。磁場中を通る荷電粒子の観察するなどです。しかし、ここでまた一つ私の中で課題が生まれました。それは、これらの物理現象を観察したときに流れる生徒達の「それで？」という空気をどう学習につなげるかです。確かに磁場を横切る荷電粒子の観察をして磁場を強めると半径が変化することが観察されます。しかし、ローレンツ力などを理解していない生徒達がこの現象を見た場合は「磁場を調節するつまみを回したら粒子が描く円が小さくなった」くらいにしか感じないのです。

そこで実施したことは、考察をしながら実験していく授業です。本来は実験を行ったのちに、教科書の事項を学習という流れが理想です。3年生になったら既習事項がほとんどですので、その順序が入れかえると学習効果は大きいと思います。そこで私は上記の荷電粒子の観察では(1)磁場を強くすると荷電粒子の運動はどのように変化するか。(2)(1)のように考えた理由を以下の文字を自由に使い実験班の人たちに説明せよ。(3)実際に磁場を調節し実験班全員で確認せよ。というような流れとしました。そうすることで生徒たちから「本当だ！」という声が聞こえました。高校3年生別のアプローチで深い考察が可能であることを知った良い機会となりました。他にもデータロガー（ナリカのイージーセンスや、アーヘン工科大学が無料で提供しているphyphox）を用いた実験なども使い、アナログ式の実験では得られない物理量の時間変化などの考察も取り入れていきました。

先日、理科の先輩の先生方に「高校3年生で実験を取り入れたいが、原子論などは生徒実験が難しい、共通テストが目前に迫っている生徒達に、再度重力加速度の実験を行うことに対しての意見を聞きたい」という相談をさせていただきました。その際言われた言葉が印象に残っています。「同じ実験をしたとしても、他の分野との関連付け、深い考察などは高学年になれば充実していく。やってもいいのではないか。」というものです。また別の先生の「受験勉強だけをしている生徒ほど実験を苦手になっている。こうなるだろうという思い込みで実験を進めてしまう。この現状は理科を指導する教員としては悲しい。」という言葉も印象に残っています。理科教員としては実験の方法や考え方を涵養していけたらいいかと思っています。

以上が高校3年生の話です。中学2年生では、早いですが物質質量などのmolの計算に入っています。こちらでは中学1年生時と同様に実験をメインでカリキュラムを作成しています。2年生になり今までと違っている点は考察部分です。学習が進み深い考察が出来るようになりました。直近で行ったものとしては、市販のミツカン酢(酢酸の水溶液と見立てる)中の酢酸のモル濃度を調べる実験です。この実験の前に、中和滴定のノーマルの実験を行い、さらにその前にはホールピペットや安全ピペッターなどの実験器具を使う実験を行うことで、生徒たちに実験器具を使う練習の機会を複数回提供しています。もちろんmol計算は中学2年生には高度ですので、高校3年生のように大雑把に「考察せよ」という出題の仕方はしません。丁寧にヒントを出し、生徒達がしっかり考えれば超えられる程度のハードルを用意します。さらに「考察」に丸々1時間の授業(生徒の進度を見て延長)を使用しました。班ごとに学習した知識を出し合い、話し合いをしながら考察を進めていきます。その時間は教員がすることは、初めの授業の流れの説明と、全体の管理、アドバイスのみにとどめます。1時間の授業で常に観察、助言、課題の提示をし続けることになりますので、とても大変です。

ミツカン酢の濃度測定だけでなく、他にも化学反応式の量的関係を用いた実験の考察なども行ってきました。教員が考察をまとめていくよりも、生徒達のモル濃度を求められたときの喜びと、実験結果から考える理科の力の涵養はとても大きいです。先に言いましたが、教員の負担は大きく、カリキュラム上での展開も非常に難しいことは事実です。しかし、生徒達に喜びと感動を与え、探究する力を身に着ける授業を展開することは理科教員の責務だと思います。

2. 学級運営の中での喜び

ここからはクラスについてのお話をさせていただきます。中高一貫教育の中学2年生となり学校や授業進度にも慣れてきて生徒達は中学校生活を謳歌しているようです。原稿を書いている時期は、学校祭、体育祭、校外学習が連続して行われる秋で生徒達にとっては楽しくも忙しくもなる時期です。私たち教員は生徒の安全に細心の注意を払いつつ成長を促したい時期です。

この時期で私は感動した瞬間があります。それはロングホームルームの時間に、体育祭で行われる騎馬戦の作戦を全員で考えているときのことでした。「力持ちを集めて最強の騎馬を作って勝利する作戦」と「まんべんなく騎馬を作り、布陣を工夫して勝利する作戦」とで意見が別れました。そこでクラスの数人が、前者の意見には「最強の騎馬以外は負けることが前提」ということに気が付き、ためらったことが印象的でした。中学1年生の時は、自分のことだけしか考えない生徒が多く、他者に配慮することがなかなか難しいように見えました。しかし、クラスの複数人がそのような考えを持ち、賛成できないという姿勢をとったことは成長を感じました。おそらく他の先生から見たら大した成長でもないと思われるかと思いますが、教員3年目の私にとっては、感動する場面でした。最終的には、

クラスの一人が「前者の作戦だと、最強の騎馬以外がかわいそうだから、その作戦をやりたいくない」と明確に発言し話し合いが平行線をたどりました。最終的には教員側から「体育祭を、このクラスで行うにあたって全員が楽しめるように助け合うことを約束しました」という趣旨のアドバイスを言い、後者の意見を採用して「どうすれば勝てる布陣なのか」を話し合う方向に進みました。生活の中で生徒たちの成長を見ることはうれしいことであり、私は彼らの成長を垣間見る瞬間が本当に大好きです。

ここ最近クラス運営での私の課題は「生徒に考えてもらうこと」です。2年生に進級した初期に印象に残ることがありました。掃除を忘れてしまった生徒が、掃除班の人たちには謝らずに、私に謝ってきました。もちろん生徒が約束事を守らなかったときや、他者に迷惑をかけてしまった場合は指導を行います。私は生徒達と保護者に「私はペナルティを課すクラス運営はしません。しかしその都度しっかり彼らと話しをさせていただきます」と伝えていきます。掃除の件で私に謝ってきた生徒には「私に謝ってもお門違いです。あなたが掃除を忘れて帰ってしまったことで、より多くの仕事をやらなくてはいけなくなった生徒がいます。その人たちのことを考えて、今から行動して下さい。」と話しをしました。やはりその都度話しをするというのは、多忙な教員にとっては大変なことです。生徒が納得いく言葉で話をするには、時間がかかりますし、生徒も怒られると考えて、話の途中でさりげなく逃げようとしています。しかし、そのような日常生活の中に転がる1つ1つの場面を大切に、彼らの成長を促していくことが担任の仕事だと考えます。

おわりに

ここまで読んで下さりありがとうございます。ベテランの先生方、年齢の近い方々、学生の皆様、立場が違えば読んだ後の感じ方も違うかと思います。ぜひホームカミングデイなどでお会いしお話が出来たらうれしく思います。

私が教員となり、ここまでの教員生活を乗り越えてこられたのは、北里大学で友人達と学び、教職課程センターの方々にご教授と応援をいただいた結果です。この場をお借りしましてもう一度感謝申し上げます。本当にありがとうございます。私はこれまでの人生の選択に一切の悔いはありません。これから先も自身で進路を選択し、成長していこうと考えています。大学生の皆様もこれから先、自身の進路を自身で選択していくことになるかと思います。今ある大学生活を謳歌し、知見を広め、自信を持って選択をしてください。お互い頑張りましょう。